

とある年の秋。十月二十二日、金曜日。二十二時半ごろ。

『05・初デートで何を着る?』から数時間後。

日本のとある、かなり寒い地域の政令指定都市。

天気は雨。気温は二十度程度。

天気は晴れ。どうか明日もこのまま晴れであつてほしいと、主人公は思つてゐる。

場所は、主人公の自室。

主人公は今、七緒に電話しようとスマートフォンを握りしめている。

デートはいよいよ明日。

なので今、直前の挨拶的なものをしたいのである。

しかし、普段この時間帯に電話をかけた事はほとんどない。  
さすがに遅いからだ。

先日由希乃が言つていた通り、七緒の母親は、金曜日は基本的に夜間の仕事が休みらしい。

しかし、昼間は昼間でメインの仕事があるそうだ。

だから、そんな仕事で疲れている母親がいる中、のんきに電話をかけるのはどうなのか？と、苦悩しているのである。

そう。あれから主人公は七緒の母親について『検査入院は無事済んだ』という事だけ教えてもらっている。

だが、それ以上の事はよくわからない。七緒はこの件についてとにかくあっさりしており、多くを語らないからだ。

しかし、高確率で家にいると踏んでいいはずだ。だから主人公は悩んでしまう。桐生家の現状が今一つ不明な事が、それに拍車をかけていた。

というか、そんなに悩む位なら、一度『電話していい？』とメツセージアプリで確認してからかければいいのに……それすらできずに、うんうんとうなつてている。

——はあ。こういう時もう付き合つてたら、もつと堂々と連絡できるのかな。

確かに告られはしたし、本人の居ないところでは、すっかり浮かれて桐生はわたしの嫁とか、ラブラブとか言つてゐるけど。

実際には『最近仲良くなつたお友達』と変わらない関係だもんない。わたし達。……だけどもし今後、わたしが桐生の彼女になれたら。

桐生のお母さんの事とか、聞きたいけど聞けずにいる事を、はつきり聞けるようになる

のかもしない。

そうだよ。そうなるためにも、わたしは告るの！

だからほら！ がんばれわたし！

今すぐ右上の受話器ボタンをタップして桐生に電話しろ！

と、このように主人公がもだえ苦しんでいると、ふとスマホが点灯した。七緒からの着信である。

（主人公）

「！」

主人公、驚きすぎてスマホをズルッと落としそうになるが、これを何とかキヤツチし、ハアハアと荒い呼吸で握り直す。

まるで変質者だが、よく考えたら二週間前、すでに変質者宣言は済ませていた。もう、こうなつたら堂々と行こう。

そう思いながら、主人公はスワイプして応答する。

▲ ボイス加工あり

【このトラックは全編『電話加工』する】

【以降のセリフにもすべて同じ処理を施す】

【普段通りの声を出そうとしているが、少し暗く、どこか思いつめた様子の声で。】

お泊まりをしたトラック03から二週間ほどが経過しており、主人公と七緒はかなり親しくなっている。電話でも何度も話しており、その上明日はデートである。

本来なら『緊張せず、明るい雰囲気で』電話をかけているはずだ。

しかしそうならないのは、七緒の母親が手術する事になり、気分が落ち込んでいるからだ。

七緒の母親は主人公の知る通り検査入院をしていたが、数値が改善せず、入院を延長して手術を行う事となつた。

つまり、『検査入院は終わつたが、引き続き入院している』状態である。

主人公に嘘はついていないが、隠し事はしているのだ。

手術の日程は月曜日。全身麻酔を使用するので、家族の立ち合いが必要である。

そのため七緒は、月曜日午前中は、学校を休んで立ち会う事になつていて。

しかし七緒は、この件を主人公に打ち明けられずにいる。

重苦しい家庭の事情を知られて『面倒くさい女の子だ』『交際したら、苦労が多そうだ』

と思われるのが怖いのである。

仮にそうはならなかつたとしても、明日のデートで主人公が必要以上に自分を気遣つた

り、心配してくれたりするのではないかと思うと、申し訳ない。

しかし、本当は主人公に頼りたい。全部打ち明けて楽になりたい。  
だから、できる事なら、主人公から気づいてほしい。

自分からは言い出せなくとも。主人公が『なんか元気ないな。どうしたんだ?』と聞いてくれれば、素直に話せる気がするのだ。

そんな期待や、主人公に甘えたい気持ちが『どこか暗い聲音』となつて表れる  
あ……こんばんは。桐生です』

〈主人公〉

「こんばんは！

……わあ。電話ありがとう。

実はさ、今、こっちからかけようと思つてたんだ

……よし！ 初手は悪くないぞ！ 人間、素直が一番！

「驚いて。

照れ屋の主人公が、こうもストレートに好意を表現してくれるのは思わなかつたので  
……え？

【少し声が震える。嬉しくて、気が緩む。】

思わず泣きそうになるが、ぐっとこらえる  
先輩もかけようとしてくれてたんですか?】

△主人公△

「うん。だから、すぐ出たろ?」

主人公が腹をくくつて素直な気持ちを伝えると、七緒もなんだか嬉しそうにしてくれる。  
こんな事を言つたのは初めてだから照れるし、今にも心臓が口から飛び出しそうだが、  
うまくいったようだ。

しかし、今度は七緒の声が妙に暗いのが気になる。

もしかして、今日のアルバイト中に何かあつたのだろうか……?

【息づかいだけで表現する。大きく息を吸つて、涙をこらえる。

主人公の恥ずかしそうな、でもどこか得意げな声が可愛くてたまらない】  
△△△。

【とても嬉しい。その言葉だけでとても救われる。  
なので、主人公に甘えなくとも耐えられる気がしてくる。

『やつぱり手術の件は、今は黙つていよう。せめて明日、頃合いを見て伝える事にしよう』と方向転換する

「へへ。気が合いますね。私達」

〈主人公〉

「……うん。わたしもそう思う！」

「で、どうした？……なんか桐生、元気なくないか？」  
「あ！もしかしてまたバイトで変な奴に遭つたのか!?」

「内心ドキッとしつつ、なんでもない素振りでごまかす。

主人公が心配してくれる事がとても嬉しい。

「その気持ちだけで頑張れる気がするので、嘘をつき通す事にする」  
「え？あ。いえ、元気ですよ。」

【『声疲れてた』とは『声が疲れた印象になつていた』という意味】

「今日忙しかつたんで、声疲れてたかもですね」

〈主人公〉

「……そうか？それならいいんだけど……」

主人公、そうは言いつつも、

……そうかなあ。本当に忙しかつたつてだけなのかなあ。  
どう聞いても何だか変なんだけど、桐生の声。

もしかしてまたお母さんに何かあつたとか、あの変なクレーマーおばちゃんが来襲した  
とか。嫌な事があつたんじやないのかなあ。

でも桐生、そういうの言わないもんなあ。

多少仲良くなつた今でも、仕事の愚痴とか、困つてゐる事とか、一切聞かせてくれないん  
だもん。

クレーマーおばちゃんの時みたいに『慣れてますから』とか思つてさ、我慢させちゃつ  
てるんじやないかなあ。

……確かに、いつも笑顔でいるとか、暗い話はしないとか。

桐生のそういう姿勢は格好いいと思うし、わたしも尊敬してゐる。  
でも、辛い事に慣れるなんて、あつちやいけないと思うんだ。  
ていうかせめて、わたしには話してくれたつていいんだぜ？

だつて、付き合つてはいなけれど『よく一緒に過ごしてゐる友達』ではある訳なんだから、  
さ。

いやでもそれは、単にわたしが頼りないから、言う気にならないだけなのかも。  
ああ、もう付き合つてたら、こういう所にもつつこんでいけるのかな……。

と、もやもやの無限ループに突入しかける。

すると、七緒もそれを察したのだろう。

それとなく話題を変えて、明るい方向へ持つていこうとしてくれる。

「それとなく話題を変える。

都合が悪くなると急に話題転換をするのは、七緒の常套手段になつていて  
いよいよ明日ですね。デート♥

遊園地とかほんとずっと行つてないんで、楽しみです」

〈主人公〉

「……うん。わたしもすっげー久しぶり。

特にスイパはほしいぶん昔に、家族で行つたつきりなんだよね」

それはとてもありがたい気遣いだが、主人公は喜べない。  
たとえ今楽しくない空気になつたとしても、自分達は今、もっと話すべき事があるので

はないか。

たとえ七緒がそれを望まなくとも。自分はもつと『本当は、何かあつたんじやないのか?』と、食い下がるべきなのではないか。

そう思つたのだ。

〈主人公〉

「桐生は……」

「少し間をあけてから。

唐突に切り出す。これ以上主人公の声を聴いていると、泣き出しそうになるので

あの。先輩」

〈主人公〉

「ん?」

だけどその決意は、七緒の唐突な言葉で途切れる。

そういえば、七緒はよくこういう事をする気がする。

ふいに距離を詰めて来たかと思つたら、急に別の話。

その度に主人公は困惑させられて、必死に返事をしているうちに、七緒のペースにのまれるのだ。

初めはそれを、彼女の気まぐれによるものだと捉えていた。

だけど、今は違うようだ。

一見不規則に見える七緒の行動には、実は全部理由や根拠があつて。  
だけど主人公はそれに気づかないから、翻弄されるばかり。

そんな気がしてきたのだ。

でも主人公は今、それを掘り下げる勇気がなかつた。

たとえば今ここで悪い雰囲気になつてしまつたら、明日に響いてしまう。

……だつたら、明日頃合いを見て聞く方がいいんじやないのか。

そんな風に、先延ばしを選んでしまう。

このように、主人公と七緒は確かに気が合つていた。

目の前の問題を避けようとするあまり、お互い本当の気持ちを話せずにいたのだ。

「【急に話題を変えた事を申し訳なく思いつつ、続ける。

『電話口で泣き出さないためには、早めに電話を切るのがいい。しかし、今の自分の気持ちを伝えたい』と考へている

あの。こういうの、行く前に言うのも変なんですけど。

【少し間をあけてから】

私、今回誘つてもらえて。

【声が少し明るくなる。『すつごく』を強調して】

すつごく嬉しいです。

【気分が明るくなつてくる。】

無理にでも嬉しい事を話しているうちに、気分が高揚してきたので。

七緒は、主人公のついた嘘を信じている。遊園地のチケットも、バス券も、由希乃ではなく、主人公の親戚がプレゼントしてくれたのだと思っている。

つまり『主人公が、自分の意思だけで七緒を誘つた』と思つている。

七緒はこれが、ものすごく嬉しい。

誘われたのは土曜日の夜。お泊まりの次の日だつた。

なので『あの時、自分がちゃんと気持ちを伝えたから、先輩が信じてくれたのかもしれない。もしかすると、脈があるのかもしれない』と期待し始めている

チケット下さった先輩のご親戚にも、どうぞよろしくお伝え下さい』

【主人公】

【桐生……】

主人公、七緒の言葉に、ずきつと胸が痛くなる。

由希乃と相談して決めた事とはいえ、七緒に嘘をついてしまったからだ。

主人公は、間違った事をしたとは思っていない。

主人公は由希乃の『七緒に、遊びに行く機会を作りたい』という願いに共感したからチケットを受け取った訳だし、そのお礼として、ただで七緒と遊園地に行ける事になつた。だから、由希乃との約束は守るつもりだ。

多少の罪悪感に囚われたからと言つて、今から『実は田中さんが……』とねたばらしするつもりはない。

だけど、あまりにも嬉しそうな七緒の声を聴いていたら、後悔が頭をもたげる。

こんな事になる位だつたら、あの時安易にイエスと言わずに、由希乃ともう少し話し合つてから決めるべきだつたのではないか。

それができないのなら、せめて初デートは別の場所で、主人公自身のお金で出かけてから、遊園地に行くべきだつたのではないか。

そんな気持ちが沸きあがつてきたのだ。

「照れ笑いして。自分らしくない位はしゃいでいるので、恥ずかしい。

これ以上恥ずかしい姿を見せたり、気が緩んで泣き出してしまった前に、電話を切ろうと考えている】

へへ……じやあ。ほんとにそれだけなんで。  
寝ますね♥』

しかし、その道はもう選べない。

こうなつた以上は、主人公はこの件をちゃんと隠しきる。その上で、七緒に楽しんでもらう義務があると思うのだ。

そんな事を考えていると、七緒が電話を切ると言い出した。  
だが、それはちょっと早すぎる。当然主人公は食い下がつた。

△主人公△

「え？ もう切っちゃうのか？」

せつかくかけてくれたんだし、もう少し話そうぜ』

「※マークまで、ちょっと甘えた感じで。

親しくなつて いる証明として『トラック04までは、明らかに存在しなかつた』リアクションをする。

自分も主人公と同じように、本当はもつと話したいと思っている事を伝える  
え？ 私だつて話したいですよ。

でもね、今日はダメ。

だつて、早く寝ないと明日に響いちやいますもん」※

〈主人公〉

「……！」

……確かに、それはそうかも！

そうだ。すうにも別れ際『当日朝に酔い止め飲むのはもちろん、今日も早く寝て下さいね』って、釘さされてたんだつた。

主人公、七緒の言葉に同意し、思わずそのまま『そうだな。寝よう！』と言いかける。しかし、本当にそれでいいのだろうか。

確かに明日の事を思うなら、七緒と涼羽の言う通り、可及的速やかに寝るべきだ。しかし主人公は今、何か決定的に、すべき事ができない気がするのだ。

……そうだよ。もし桐生が今何か嫌な気持ちや悲しい気持ちでいて。でも、それをわたしには言いたくないんなら。

せめてわたしは、桐生が楽しい気持ちで寝れるようにこう……たとえば楽しい提案とか

を、してみるべきなんじや、ないのか？  
たとえば……たとえば……。

〈主人公〉

「ちやんと寝とかないと、バスで酔つたら大変だもんな」

「ちょっと甘えた感じで」

ね？ 私酔いやすいんで。気を付けなきやなんです。

【くすくすと嬉しそうに。】

こんな会話をしている事自体が、嬉しくてたまらない  
あーでも、寝られるかなあ。ふふふふ♥』

〈主人公〉

「……あ、そうだ！」

「【きよとんとして。主人公が何を言おうとしているのか、見当もつかないので】  
ん？」

その時浮かんだのは、ほとんど適当な思い付きだった。

七緒がちょっとでも楽しい気持ちになつて、眠りにつければいい。

それだけが理由で目的の、めちゃくちやなでたらめだつた。

〈主人公〉

「勝負しようぜ。どつちが早く寝られるか！

そしたら、眠くなくても、寝る気になるだろ？」

「くすくすと嬉しそうに。

セリフの内容とは裏腹に、うきうきしている。まるで『ぜひ勝負しましよう』『あなたの提案する事なら、私は何でも嬉しいです』と言つているかのように話す】

え？ 何ですかその勝負。早く寝た方が勝ちつて。

それ、どうやつて勝ち負け決めるんですか？』

〈主人公〉

「……えーとな。今から寝るだろ？」

だから、話しながらアイディアを練つていた。

「くすくすと嬉しそうに相槌を打つ

うん

（主人公）

「そしたら、夢見るだろ？」

「くすくすと嬉しそうに相槌を打つ

うん  
♥

（主人公）

「そこに相手が出てきたら、勝ち。

それは自分が、相手より先に寝てた。事になるからな！」

理屈もなれば根拠もなくて、つじつまも全然あつていな話をしていた。

「くすくすと嬉しそうに。

もつともな指摘をするが、そんなセリフとは裏腹に、まるで『そのルールで構いません。

『ぜひ勝負しましょう』『あなたの提案する事なら、私は何でも嬉しいです』と言っているかのように話す』

え？ そんなうまく行きます？

ていうか、相手が夢に出てきたら勝ちって、それ逆じやありませんか？

先に夢の世界に来てる人が、先に寝てるって事になる気がするんですけど』

『主人公』

『あっ』

それでも、七緒は笑つて聞いてくれる。

『くすくすと嬉しそうに。元々、主人公のルールで勝負する気だったので。

主人公が自分のためにこんな無理のある提案をしてくれていると、わかっているのででも、いいですよ。そのルールで行きましょう。

『少し間をあけてから。

『勝負に対しても、明日のデートに対しても、やる気十分』という感じで

私、勝ちますからね。絶対先輩の夢を見ます』

主人公のくだらない、口から出まかせに等しい話さえ、矛盾すら理解した上で『いいよ』と言つてくれる。

こんな時主人公は、自分の存在を丸ごと受け入れてもらつているような気がする。嬉しくて胸がぎゅつとなるし、そんなにも自分を大切にしてくれる七緒への感謝の気持ちでいっぱいになつて。それから……なんだか泣きそうになる。

こんな風に自分を想つてくれるのは、きっと七緒だけだ。

そう確信する。

だから思つた。

……わたし、桐生の事、めっちゃ好きだ。

始めは『なんでわたしの事なんか』『人の事からかって遊んでるんじゃないのか』つて思つてたけど。

今は桐生がちやんと、わたしの中身を見て、わたしつて遊んでるんじゃないのかつて思つて、こうして一緒に居てくれるんだつてわかる。

だから、もし桐生がまだわたしの事好きだと思つてくれてるなら。絶対、絶対付き合いたい。

そして、桐生がわたしを選んでよかつたつて思うような、ものすごく幸せなお付き合いがしたい。

だから……だから……。

わたしは、本気で寝るぞ！

まずは夢の中で桐生を見つけて、絶対、絶対一緒に楽しく過ごすんだ！

「すっかり普段の調子に戻って。

『勝負に対しても、明日のデートに対しても、やる気十分』という感じで】  
じやあもう切れますね。即寝ないと」

〈主人公〉

「おやすみ。じやあ、明日はよろしくな」

「【上機嫌で。主人公のお陰で、すっかり幸せな気持ちになつていてる】

はい

おやすみなさい。先輩。

じやあ。夢で会いましょうね

—

〈主人公〉

「……おう！」

こうして主人公は『通話終了』をタップした。

それからどう考へても眠れそうにない高揚した気持ちのまま、それでも慌てて、即座に布団に入る。

そして思う。

明日はきっと、最高に楽しい一日になると思う。

桐生の事が大好きなわたしと、こんなわたしを好きだつて言つてくれた桐生が一緒に出掛けんのだ。

絶対にいい事ばかりが起きるに決まつてゐる。  
だから、一刻も早く眠らなくちや——……。

と。

ここでフェードアウトして終了。